

10.自然災害は他人事ではない、いつでもどこでも起きること

日本列島は、東アジアの東端に位置していることから、自然災害の素因と誘因を資質として持ち合わせています。それがまた、豊かな自然が存在し多くの恵みをも享受しているということになります。その素因とは地形や地質で、誘因は主として気象条件と考えてよいと思いますが、自然災害は災害の対象物が人であり、モノですので、寺田寅彦が言われた文明の進歩とともに被害は深く広がるということになります。つまり、我々の暮らしが便利になれば、被害対象物も多様になって一時的にしろ二次的なものにしろ様々な災害が発生するということでもあります。素因である地形や地質も不変ではなく機械的或いは化学的作用によって劣化しますし、人工改変などによる変化や異変は常なることで、いふならば準安定なものも多く、外的作用があれば様々な動きを示すということになります。

この自然災害への対応のベストは、何が起きそうなのかを早期にキャッチして避難の方法を判断することにつきます。それには、素因よりも誘因により敏感になってほしいと思います。素因に対しては、どこで何が起きるのかは事前にある程度マーキングできますので、誘因に注目することがより重要な気がします。もちろん、兆候に敏感になって気になることを見過ごさない、警報が出ている中で見に行かない、都合の良い情報に飲み込まれないことなども大切です。

気象情報はリアルタイムで、スマートフォンで確認できますので、その情報の意味することを理解して、次の段階への行動を起こすべきです。いつも暮らしている地域がどのようなリスクを有しているのか、避難ルートはどうかなどは平時から確認しておくことは当然ながら、見知らぬ土地に来ている時などはハザードマップなどで確認する習慣が望ましいと思います。自然災害は、そのものによる影響も恐ろしいのですが、それによる後退的あるいは余効的な二次災害も同様に恐ろしいのが特徴です。避難は早期に行われたのに、家に戻るタイミングの判断が不適切で被害に遭遇した例も少なくありません。

自然災害には、これまではなかったとか、まさかここまで被害が来るとは想像していなかった等が言われますが、必ず発生した理由があります。つまり潜在していて見えていなかったものが顕在化しただけということになります。後ろの山から土石流が来るとは思わなかったとか、川から相当距離があると思っていたというような感覚は自然災害では通じないのです。これらの背景には、ハード対策に対して盲目的な信頼、旧地形への無知、山や斜面への無関心というようなことが重なっています。

大雨が降れば、地震があれば、火山噴火が起きればなんらかの大地への影響が、即効的にしろ時差を有するにしろ発生します。ある意味では自然が安定化するためのシステムの稼働なのかもしれません。そして道路や造成といった人工改変地は、外的作用によって拍車をかけるように大きくバランスを崩されて、崩壊、崩落、土石流、火山灰降下、地すべりといった現象が発生します。不確実性または不定性なものへの対応は、さまざまな分野で問題点や多くの課題がありますので、自然災害ではどのような対応が望ましいのか可能なのかに関心を持つことが、日本列島での暮らしには重要なことだと思います。